



三谷雅子さん(42)。ブルース・リーのTシャツがユニフォーム。

は愛知県岡崎市生まれだ。テレビに映る「アルプスの少女ハイジ」や「ムツゴロウさん」を見て、牛とともにのんびりと暮らす生き方に憧れた。酪農家になるために東京農業大学に進学し、入学早々サークルの見学で出会ったのが、4年生の剛史さんだった。

剛史さんは大学卒業後、農業の現場に飛び込んだ。埼玉でコマや野菜、果樹を育てる農家の元で働いてみたが、どうもピンとくるものがなかった。半年後、農業雑誌で見かけた「放牧酪農」に興味を持ち、岩手の酪農家の元へ。しかしそこで腰を落着けることはなく、また半年すると辞めてしまった。放牧酪農を売りにしている農家だったが、実態は放牧ではない周辺農家の牛乳を混ぜて売っていた。剛史さんは自分も悪事の片棒を担いでいるような気がして耐えられなくなった。そんな事情を知らない他人の目には、剛史さんは甲斐性なしに映っていた。「あんたまだ剛史くん付き合ってるの？あの人、見込みないよ」と親

や友人からは散々こき下ろされ、雅子さんの気持ちはぐらついた。ここでドラマのような展開が訪れる。雅子さんは旅先で知り合ったご婦人にいたく気に入られ、「うちの息子と、どうかしら？」と見合いを申し込まれたのだ。彼女は一族で会社を経営するたいへんな資産家だったが、雅子さんはキッパリ断った。「私から約束したんだから。青田買いを信じるしかない」。

放牧酪農をやるぞ

大学の長期休みを使って、雅子さんは静岡の酪農家の元で研修をした。そこでは牛舎の中で100頭ほどの牛を飼い、たった二人で搾乳をしていた。早朝4時から働いて、搾乳が終わると朝食を飲み込むように食べる。掃除が大変なので牛がフンをすると憎らしかった。牛の病気や事故が後を絶たず、気持ちが落ち着かなかつた。昼食は牛舎の中で立ち食いをして、人はいつも疲れていた。他にも4〜5軒の酪農家で働



1.三谷剛史さん(46)。2.牛乳缶を乗せて工房と牛舎の間を走る軽トラック。搾りたての牛乳がチーズやヨーグルトになる。3.フロマー・ジュブランのチーズケーキ、ミルクアイス添えて。三谷家のおやつは特製乳製品を使った手作りが定番。

「あっ！私、この人と結婚しよう」。一目見て雅子さんは直感した。それから1週間後、酔っぱらった勢いで「結婚してください！」と求婚。こちらも赤ら顔の剛史(たけし)さんは「はい」と答えた。ここで引き下がらないのが雅子さんのちゃっかりしたところだ。適当な紙を引っ張り出してきてその場で一筆、母印まで頂戴し、念入りに証文を取った。23年前、大学生だった頃のうら若き三谷夫妻の姿である。「なんでだったのかな」と雅子さんは真面目な顔をして首をひねる。「俺がカッコよかったんだよ」と剛史さんはニヤニヤ。

青田買い

三谷剛史さん(46)は大阪府堺市で生まれ育った。授業中はいつも外を眺めていて、学校が終わると毎日のように釣りに出かける少年だった。「大好きな自然の中で、何か一生懸命になれることがしたい」と東京農業大学に進学した。雅子さん(42)